

1. 活動名 おべんとうごっこ

2. 子どもの姿

〈現在の子どもの様子〉

- ・未就園児クラスは6組の親子が5月25日、または26日より週1回登園しており、本時は8回目である。回を追うごとに、親子ともに慣れてきて、気に入った遊具や場所で遊ぶことを楽しめており、表情が豊かになり、発語が増え、保育者からのかかわりにも答えてくれるようになっている。（※1）子どもが好きな遊具を選び、遊んでいるそばに親がおり、親はその様子に合わせて声をかけたり、子どもからのかかわりに応えたりしている。また、ドキュメンテーション作成のための撮影をしているため、一緒に遊ぶよりも見守っていることが多い。
- ・絵本の読み聞かせや制作など、みんなで一緒に活動する場面でも、参加する子どもや、楽しめる子どもが増えてきている。5回目頃には保育者に名前を読んでもらって返事をする場面で、ほぼ全員が友達が返事をする様子を見たり、自分の順番まで期待して待ったりする姿が見られるようになった。
- ・当初の好きな遊びの場面では、親子が個々に遊んでいたが、4.5回目ぐらいから、友達の遊んでいる遊具と一緒に使おうとしたり、同じ場で遊んだりする姿が増えてきた。2組ぐらいの親子がしばらく同じ場にいることが増え、そこでは保護者同士が子どものことで会話をする姿も見られる。
- ・室内遊びでほとんどの子どもが一度は選ぶ遊びがままごとであり、ごちそうを器に入れたり、キッチンで料理をしたりしている。そこでの保護者は子どもに声をかけるか、食べる役をすることがほとんどである。ごちそう類を大量に机の上に盛り上げていた子どもが、ごちそうを選んで器に入れるようになるなど、遊び方が変わってきている。作ったごちそうを人形、お母さん、保育者に食べてもらうことを喜ぶ姿も増えてきている。
先日から弁当箱を用意しているが、弁当を作って親に渡し、ふたを開け喜ぶ顔を見てにやりとした子どもの姿が見られた。

〈目指す親子の姿〉

- ・大好きなお母さんまたは子どものために弁当を作るという行為を通して相手のことを意識したり、相手の喜ぶ姿を見て自分も喜びを感じたりするという体験をすることで、今後の親子のかかわりの中で親子共に人を思いやるという気持ち（care）を育ててほしい。

3. 活動の目標

- ・食べ物の名前を知る（知識・技能の基礎）
- ・相手のことを思って食べ物を選んで弁当を作る（思考・判断・表現の基礎）
- ・相手が喜ぶ姿に関心を示したり、その姿に喜びを感じたりする（学びに向かう力・人間性等）

4. 評価基準

ア 知識・技能の基礎	イ 思考・判断・表現の基礎	ウ 主体的に取り組む態度
① お弁当を作るときや食べるときに、親子で食べ物のお話をします。 ② 知らないものについては「これ何?」と質問する。	① 相手を意識して弁当に入れる食べ物を選ぶ。 ② 毎回、内容を変化させるなど、自分なりに工夫する。	① 弁当を作ることを楽しむ。 ② 食べてもらうことを喜ぶ。 ③ 相手が食べる様子に関心を持つ。

5. 環境構成について

・活動内容の設定理由

未就園児クラスでは終始親子が一緒の場において、親からの声掛け、またはかかわりを持っている。中でもままごとは相手とのやり取りが生まれやすく、コミュニケーションを行う力を育むことができる。料理のやり取りもそれにあたるが、弁当箱は中身が見えないので、ふたを開ける行為や、相手がふたを開ける行為を通して、より相手を意識することができるのではないかと考えた。

ままごと遊びは、子どもが日常生活における食に関する体験を自己の中に取り込んだものを時系列的に關係づけて再表出する行為(吉澤千夏ら2001)であり、ままごと遊びの中に出現するスクリプト(日常的に行われる活動の時系列手順に関する知識(Schank and Abelson 1977))にかかわる研究によると、ままごと遊びの展開に母親が重要な役割を担っていることが示されている(吉澤千夏ら2001)。一方幼児教育における「ままごと」について、片平ら(2016)は、「ままごとの模倣のモデルとなるのは身近な大人や年上の子どもである場合が多いが、日常の中でいかに魅力的なモデルと出会うかということも遊びの広がりにかかわってくる」と指摘している。玉川(2019)は他者とイメージを共有するだけでなく、遊びを他者の存在に気づいていく際の重要な体験ととらえ、その際には保育者が子どもの内的活動(外から見えている姿のみならず、活動している子どもの見えていない心の動きや思いを理解し、着目していくことが指導計画を考えていく保育者にとって重要)に注目し、応答性のあるかかわりをすることの重要性を示した。以上のことから、子育て支援の場で保育者が意図をもってままごとあそび(べんとうごっこ)を取り入れ、その際に保育者がモデルとなって子どもの内的活動に働きかけることによって、この活動で目指す親子の姿に大きく寄与できると考える。

・教材について

(弁当箱) 子どもが開け閉めしやすく、5,6 個ぐらいのごちそうが入る大きさにすることで、食べる時も詰める時も自分でできるようにする。

(食べ物) 色や形など本物に近い形状で、子どもたちがほぼ知っていると思われる食べ物にすることで、会話が生まれやすくするとともに、何であるかを分かって選べるようにする。また、これまでままごとコーナーに置いていなかった食べ物にすることで、新奇性から、意欲が高まるようにする。

(食べ物を入れるかご)

大きめのかごを用意して、かごの周りで弁当が作れるようにする。また、かごにはお腹一杯食べた様子がわかるイラストを付けておき、食べたらかごに入れることを理解しやすいようにする。

・導入の工夫

うさぎやゾウなど子どもたちがよく知っている動物とそのお弁当を描いた「だっだっだーれのおべんとう」を読んで弁当に興味をもてるようにする。

・展開の工夫

保育者がごちそうの入った弁当を用意して、子どもたちの目の前で食べることで、自分も食べたいと思えるようにする。子どもたちそれぞれに中身の入ったお弁当箱を用意しておき、ふたを開けるときのわくわくした気持ちが味わえるようにすることで、食べたい気持ちや自分でも作りたい気持ちが高まるようにする。食べたら「おなかいっぱい」と言って、かごに戻すことを示し、そのかごの周りで、それぞれが弁当を作ることを楽しめるようにする。

親子の会話を促すために撮影をせず一緒に遊ぶよう伝える。活動の合間に保護者に活動の位置やねらいを伝えるようにする。

7. ESD との関連

○活動を通して主に養いたい ESD の視点

- ・連携性:作った弁当を食べてもらう場面で相手が喜ぶ姿が自分の喜びになる態度を養うことができる
- ・責任制:弁当を作る場面で、親子で協力する態度を養うことができる

○活動を通して主に育てたい ESD の資質能力

- ・コミュニケーションを行う力:弁当ごっこは親子のかかわりを促進する
- ・他者と協力する態度:親子で先生にお弁当を作る行為
- ・つながりを尊重する態度:相手にお弁当を食べてもらうことを喜ぶ
- ・進んで参加する態度:お弁当を作ることを楽しむ

○ESD で育てたい価値観

- ・幸福感に敏感になる 幸福感を重視する

(身近な人の表情や言葉から相手の喜びを感じることが、幸福感に敏感になることにつながるのではないか)

○貢献できる SDGs

17:パートナーシップ

8. 本時の展開 (7月14日:7組の親子 7月15日:4組の親子)

予想される子どもの活動	予想される親の活動	配慮
・絵本「だっだっだーれのおべんとう」を見る	・絵本や絵本を見ている子どもの表情を見る	・子どもたちが知っていたり、好んだりしそうな食べ物を指し示しながら取り上げ、弁当の中の食べ物内容に関心が高まるようにする。
・保育者が弁当を食べるのを見る	・保育者の言動や子どもの表情を見る	・ふたを開けるときに中身に期待する様子を大げさに示したり、一つ一つをおいしそうに食べたりすることで、自分もやってみたいと思えるようにする
・保育者から弁当をもらう	・子どもの喜びに共感する	・ふたを開けた時の喜びが感じられるように、みんなで一緒に開けることを伝えながら配るようにする。
・開ける	・子どもの気持ちに共感する	・開けた時の喜びに声を出して共感することで、喜びが共有できるようにする。

<ul style="list-style-type: none"> ・子ども又は親子で一緒に食べる。 ・食べ物について会話をする。 ・ごちそうさまかごに入れる ・親子で先生に弁当を作る ・先生にお弁当を届け、ふたを開けて食べる様子を見る ・おうちの人が作るのを待つ ・ふたを開けて食べる ・子どもが弁当を作る ・親が食べる様子を見る 	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に食べたり子どもが食べる様子を見たりする。 ・「〇〇が入っているね」「これは何かな」等子どもに問いかけたり答えたりする。 ・子どもの行動を言葉にしながらかごと一緒に作る。 ・子どもの姿を見守り、戻ってきた子どもを認める声掛けをする ・弁当を作る ・子どもの様子を見たり、話しかけたりする。 ・顔を手で覆って待つ ・「ありがとう」と言って受け取り、ふたを開ける ・弁当を食べる 	<ul style="list-style-type: none"> ・好きなものが入っているかななどを聞きながら食べる様子を見守り、中身への興味関心が高まるようにする。 ◎ 会話を促し、子どもが親と会話しながら食べることを楽しめるようにするとともに、食べ物一つ一つの名前に関心を持てるようにする ・「おいしかったね」「ごちそうさま」と言いながらかごに入れるところを示したり、子どもが入れるときに声をかけたりして、食べたらかごに入れるという「べんとうごっこ」のシステムを理解できるようにする。 ◎ 会話することが大切であることを伝えたり、保育者がモデルとなるよう子どもに話しかけたりして、親からの語りかけを促す ・待っている時に手で顔を覆い、待つ行為がわかりやすくすることで、次に自分が楽しみに待てるようにする。 ・ふたを開ける様子や食べる様子に関心を持ってもらえるように、子どもの顔を見ながらふたを開け、ひとつずつ丁寧に食べるようにする。 ・待つことも楽しめるように、保育者が寝て、その横で一緒に待つように促す。 ・嬉しい気持ちに共感し、作ってもらった喜びを感じられるようにする。 ◎ 子どもの表情を見逃さないように伝え、子どもの喜びが保護者の喜びになるようにする。どのような気持ちで作ったかを伝えるよう促し、子どもが作ってもらった喜びを感じられるようにする。 ・個々の子どもの思いをくみ取って言葉にしたり、お母さんが待っていることを伝えることで、お母さんのことを思っで作れるようにする。 ・お母さんが喜んでいる様子を伝え、お母さんが喜ぶ様子を見て嬉しいと感じられるようにする。
--	--	---

引用文献

吉澤千夏・大滝ミドリ(2008)1歳児のままごと遊びにおける「食べる」「飲む」にかかわる母子の表出スロット
 玉川朝子(2019)2歳児クラスのままごと遊びにおける保育者の応答的かわりの一考察
 片平知世、村中李衣(2016)ノートルダム清心女子大学紀要 40. pp81-96

別添※

日時(9:30~11:00)	好きな遊び(50分)	みんなでする活動(30分)
① 5月24日 25日	室内:ままごと・のりもの・アンパンマン・ブロック チューブ・手作りおもちゃ 戸外:車・滑り台・総合遊具・うさぎを見る 園内散策 緊張している様子だが泣いたり遊べなかつたりする子どもはいない。 ・片づけた後も遊ぶので、完全に視界からなくす	返事 手遊びふれあい遊び:「かして」「おふろ」 絵本:「だるまさんが」「てんてんてん」 製作:テントウムシ(シール貼り) 体操?:「♪あるいてゆこう」以下毎回 ・「♪はじまるよ」を開始 子どもは抱っこでぐるぐる回してもらったり、高く抱き上げてもらったりするので喜ぶ。活動の始まりが分かりやすい。
② 5月31日 6月1日	・選ぶ遊びはほぼ同じ+砂場遊び ・土山に上る ・ドキュメンテーション開始	・返事:タンバリンにタッチを開始 以下毎回 手遊びふれあい遊び:「かして」「おふろ」 絵本:「おへんじはい」「ぼーるがぼーん」 製作:花紙ちぎり ポールにして遊ぶ
③ 6月7日 8日	・チューブ、洗濯ばさみなどで遊ぶ子どもが増える ・中積み木も使用しはじめる ・砂場で遊ぶ子どもが増える	手遊びふれあい遊び:「おふろ」「グーチョコキ・パー」 「おいらははらぺこあおむし」 絵本:「はらぺこあおむし」「 製作:かたつむり(ゆび絵の具) 運動:積み木の一本橋・ビリポ・トンネル
④ 6月14日 15日	・工具 ・一カ所で遊び時間が少しずつ長くなる ・お気に入りのおもちゃや場所決まってくる ・保育者にも笑顔 ・保育者ともかかわって遊べるようになる	手遊びふれあい遊び:「ニコニコめそめそ」 「びったんこ」 絵本:「かおかおどんなかお」「あめあめふれふれ」 製作:あじさい(花紙まるめ・のり) 体操?:「♪あるいてゆこう」一緒にする子ども増 製作にもじっくり取り組めるようになる
⑤ 6月21日 22日	・走り回っていた子どもが落ち着いて遊ぶようになった ・友達の遊んでいるところに行ったり、おもちゃを一緒に使ったりするようになる ・保護者との会話の中で、「大きくなった」、「変わるわってきた」など聞かれるようになる	返事:友達がタッチするのを見る 手遊びふれあい遊び:「びったんこ」「大根漬け」 絵本:「たまごのあかちゃん」「 製作:たまご(サインペンで描画) ・雨天のため「ボールプール」で遊ぶ
⑥ 6月28日 29日	・水遊びの環境(タライやバケツに水 マキロン容器の水鉄砲・ペットボトルシャワー、RI容器、スポンジ、洗剤スプーン) ・水遊びでは長く遊ぶ子どもが多い ・自分から保育者にかかわりに来る子どもが見られるようになる	返事:友達の名前を呼ぶ 手遊びふれあい遊び:「 絵本:「だるまさんが」 製作:ころころだるま(セロテープ・サインペン) 体操?:「♪あるいてゆこう」真ん中に集まれた
⑦ 7月5日 6日	・手作りおもちゃのところで少し工夫して遊ぶ 水遊びの環境+筆	手遊びふれあい遊び:「」「」 歌:「たなばた」 絵本:「」「」 製作:笹飾り「星つなぎ」
⑧ 7月12日 13日	・水遊びをする子どもも少ない	手遊びふれあい遊び:「あいすくりーむたべたいな」 「おふね」 絵本:「だだだだ〜れのおべんとう」「 製作:うちわ(はじき絵) 親子遊び:「おべんとうごっこ」

○実践後の考察（ESD ティーチャープログラム発表パワーポイント抜粋）



4. 評価基準

ア 知識・技能の基礎	イ 思考・判断・表現の基礎	ウ 主体的に取り組む態度
① お弁当を作るときや食べるときに、親子で食べ物のお話をします。 ② 知らないものについては「これ何？」と質問する。	① 相手を意識して弁当に入れる食べ物を選ぶ。 ② 毎回、内容を変化させるなど、自分なりに工夫する。	① 弁当を作ることを楽しむ。 ② 食べてもらうことを喜ぶ。 ③ 相手が食べる様子に関心を持つ。

4. 評価基準

ア 個人差あり。作る行為が面白く会話のない親子もいたが、普段の遊びの時より話しかけている親もいた。 ① ② ほぼ見られなかった	イ 食べてもらう相手は意識しているが、相手のために入れるものを選んでいる様子はほとんどなかった ① ② 毎回、考えて中身を詰めている姿が多かった。自分のお気に入りをおも入れしている姿も多々見られた。	ウ どの子どもも作ることを十分楽しんでいた。繰り返し楽しむ子どもが多かった。これまでみんなとする活動への関心が少ない子どもが積極的に参加していた。 ① ② 食べてもらうことは嬉しい。親や先生に見せる行為が嬉しい。相手が食べる様子をじっと見ている子ども、にこにこしながらみている子供、先生に渡した後、少し離れたお母さんの側でじっと見ている子どもがいた。 ③
---	---	--

当日のドキュメンテーションから

きょうのひとこま (めばえクラス)



7月12日

お弁当作り楽しかったね。
ママに初めて作ってくれたホットケーキ弁当
一生忘れないよ。ありがとう

生まれた時の子どもは、自分では何もできない。親にとって、子どもが小さい時は自分がお世話をする存在という感覚？認識？を持っていると考えられる。

この文面からは、そんなわが子が自分のために何かしてくれたことへの感動が伝わってくる。



成長を喜びとともに、子どもを一人の人間として尊重する気持ちにつながるのではないか。

子どもを一人の人間として尊重する気持ちにつながるのではないか。

この気持ちは子育てにおいて重要？

?

7. ESDとの関連

○活動を通して主に養いたい ESDの視点

- ・ 連携性：作った弁当を食べてもらう場面で相手が喜ぶ姿が自分の喜びになる態度を養うことができる
- ・ 責任性：弁当を作る場面で、親子で協力する態度を養うことができる

○活動を通して主に育てたい ESDの資質能力

- ・ コミュニケーションを行う力：弁当ごっこは親子のかかわりを促進する
- ・ 他者と協力する態度：親子で先生にお弁当を作る行為
- ・ つながり尊重する態度：相手にお弁当を食べてもらうことを喜ぶ
- ・ 進んで参加する態度：お弁当を作ることを楽しむ

2学期を振り返って…
親子のかかわりから

ママごと遊びでは他の遊びに比べると会話は多い。
子どもが作ってくれたごちそうについて話をしたり、
「ありがとう」と言って丁寧に一つ一つ食べたりする姿も見られる
子どもから親への働きかけも多い。
保護者にとっては、見守ったり後ろからついて行ったりする遊びに比べて
どのようにかかわったら良いのかわかりやすいと思われる

2学期を振り返って…
親子のかかわりから

他の遊びはもちろん、ママごと遊びでもほとんど子どもに話しかけないお母さんがいて、気になった。

「家でもこのような感じで遊んでいるのかな？」「あまり子どもさんに話しかけないようにしてる？」と言うような問いかけをした。

アンケートより

今まで自分自身は、子どもが集中して一人で遊んでいるときにはこちら(大人)から声かけしない方がさらに集中して自分の頭で考えて遊べるかなあ、と思ってあまり過度に話かけないようにしていました。が、子どもによく声かけしているお母さんのお子さんは言葉がよく出ているなあという印象を2学期中に受けたので、参考にして声かけしてみようと思います。

2学期を振り返って…
保育者とのかかわりから

2学期中ごろから、自分から保育者に関わりを持とうとする子どもが増えてきた。

そんな時は圧倒的に弁当やごちそうをつくって持ってきてくれる遊びが多い。中には食べるところまでじっと見ている子どももいる。ままごとから離れたところで別の子どもと遊んでいる時は、お弁当を持ってきてくれる子どももいる。

- 弁当ごっこはコミュニケーションを促進することにつながっている
- 保育者が弁当を嬉しそうに食べることを知っており、そこへの期待がある
関わりたいときに相手が喜ぶだろうことをしようとしているともいえる